

「〃何事もポジティブに〃 第二の故郷」

高校一年 M・H

私はずっとイギリスに行くことを夢見ていた。だが一つ気がかりなことが・・・それは飛行機が大の苦手だという事だ。元々飛行機には〃墜落したら死んでしまう〃など〃怖い〃という印象しか持っていないかった。去年、北海道旅行で飛行機に乗った際、気圧の変化による耳の引き裂けそうな程の痛みを経験し、それが半年程治らなかつたのだ。この経験で、より飛行機が嫌いになり、今回のイギリスでも〃飛行機〃が大きなネックになっていた。当日も飛行機が上空で安定してから一時間ほど経つまで身が硬直していた。しかし、飛行機が思っていたほど怖くない乗り物だと思つた瞬間、眠気が襲い、他の誰よりも寝ていたほど怖くない自分に気付いた。そもそもこんなにも飛行機が嫌いな私が、何故イギリスに行きたいと思つたのか。それは、私がこれまで海外に行った経験がなく、新しい文化に触れてみたかつたからだ。また、自分の英語がどこまで通じ、どこが足りていないのかを、肌で直接感じ、経験したいと感じたのも理由の一つだ。

危惧していた飛行機という関門を突破し、無事、ヒースロー空港に着いた。初めて異国の地に足を踏み入れた私が最初に感じたのは、見るもの全ての表示が〃英語〃である事だ。これは当たり前前の事だが、この時私は〃これから英語を使って生活するんだ〃と改めてスイッチを入れるきっかけになつたのだ。

次の日のロンドン巡りは、イギリスに来た興奮が冷めないまま始まつた。ビックベンは、工事中だったが、〃工事中〃というのも中々見られないと思い、〃貴重なものを見ることができた〃と前向きに捉えた。この時私はこの語学研修を何があつても〃ポジティブ〃に乗り越えていこう、と心に決めた。次に楽しみにしていたバッキンガム宮殿での衛兵交代式を見た。天気が高く、とても綺麗に見るこ

とができたが、思っていたよりあつという間で、少しもの寂しい気もしたことは確かだ。しかし一番楽しみにしていたホストファミリーとの面会式が今日の最後に控えていたので、私の楽しみは既にそちらに移っていた。面会式では、ホストファミリーに会うことを楽しみにしながら自分の番が来るのを待っていた。

ついに私の名前が呼ばれ、優しい笑顔のファミリーに迎えられた。これからの日々がより楽しみになった。

ファミリーは私が想像していたよりも面白く、そして優しかった。初めて家に入った時、家の使い方や場所の説明を丁寧に教えてくれた。夕食の時も、私が積極的に喋られるような雰囲気をつくってくれたり、沢山話しかけてくれたりした。驚いたのは、アマンダ（母）が元体操の先生で、キエラ（姉）が元体操選手だという事だ。体操部である私にとってそれはとても嬉しいことで、この事実を聞いた瞬間、グッと距離が縮まったような気がした。

ホストファミリーとは、休日にショッピングやイチゴ・ブラックベリー摘み、シンバ（犬）の散歩などをした。ショッピングモールには、日本では想像もつかないほど沢山のカードが売られているショップがあり、イギリスのグリーディングカード文化を直接感じることができた。八月八日がアマンダとデイビット（父）の結婚記念日だったが、確かに、ホストファミリー全員が、それぞれカードを書いてくれた。さらに、私のホストファミリーは、それらのカードを大切に家に飾っていたのだ。この事実が、私にとって、イギリスのショップにカードが多いことに納得する一つの理由になった。因みに私は色紙に大きく習字で『祝』と書いて、綺麗な和紙で作ったバラやハート、鶴なども色紙に貼りつけて渡した。サイズは少し大きい。イギリスの文化の一つのカードに日本文化の書道や和紙を上手く融合したプレゼントになったと思う。アマンダは、そのプレゼ

ントをファミリーのカードと一緒に並べてくれた。私が家族の一員になれたようで嬉しかった。

イチゴ摘みでは、日本のように、低い位置にイチゴがなっているのではなく、目線の高さで育て、かがまずにイチゴ摘みができるようになっていた。私達を取りやすいようにしてくれているのだが、イチゴを狙う蜂などの虫が顔の前で飛び交うのは恐ろしかった。摘んだイチゴとブラックベリーは家に帰ってデイビットと一緒にジャムにした。そう、実はデイビットは料理が上手いのである。

シンバの散歩は、広大な緑地や、チェルトナムが一望できるヒルに行った。どちらもホストファミリーと過ごす時間ができ、楽しく、沢山お話しする事ができた。今までまだ本当の家族のように接する事が出来なかった私にとって、とても素敵な体験になった。

休日の夜、家の庭で、アマンダが私に体操を教えてくれた。「どの技においても足の向きは真っ直ぐよ。バレエみたいな足にならないように。それと、重心がずれないように、体幹を鍛えることをお勧めするわ。ほら、こうやって。」アマンダは、私に、体操をするうえで最も大切な筋肉を鍛える、少し変わった体幹トレーニングを教えてください。早速実践してみたが、前日の雨により、滑りやすくなっていた庭の草で転び、うつ伏せ状態になってしまった。それを見たアマンダは、私の大好きな笑い声で笑い始めた。私も、転んだことを忘れ、アマンダにつられ笑ってしまった。アマンダの笑い声は人を幸せにする。「そう思ったと同時に、また、アマンダとの距離が縮まった気がした。」

また別の休日の日には、お好み焼きをつくった。唯一の不安は、ホストファミリーがお好み焼きを気に入ってくれるかどうかだ。お好み焼きをつくっている最中、私もホストファミリーも不安だった。しかし、出来上がったお好み焼きを見て、「いい匂い！」と言ってくれ、早く食べたい、とテーブルにつき始めた。私にはプレッシャー

がのしかかるばかりだ。お好み焼きの説明や、食べ方を伝え、食べてもらった。ホストファミリー皆が「美味しい！」と言い、あっという間に完食した。とても嬉しかった。熱々のお好み焼きの上で、カツオ節が動く様子も喜んでくれた。アマンダは、日本に行きたい、と、キエラは、大学で作りたい、と言ってくれた。予想以上に喜んでくれ、少し驚いたが、お好み焼きの作り方を教えたい、と思い、作り方を書いて渡すことにした。その時、お好み焼きを説明するときに分からなくて困った単語を思い出しながら丁寧に書いた。英語で作り方を書くのは、表現が未熟なため誤解を招く可能性があり、少し躊躇したが、今自分が持っている英語力で通じるのかを試す良い機会であると、「ポジティブ」に考え、書くことにした。また、ホストファミリーが喜んでくれる顔を想像すると、楽しく作ることができた。二日目に目標にした、「ポジティブ」はここでも役に立った。そして、その作り方を見たアマンダは、「とっても嬉しい！ それと、あなたの英語は素晴らしいわよ。」と言ってくれた。「ポジティブ」に考えて起こした行動が、幸せを生んだ。「語学研修で身に付けるのは英語だけではない」。わかってはいたが、実際は、英語力を身に付けることを主な目的にしていた私にとって、無くてはならない経験になったと思う。

学校では、英語でのアクティビティなどを通して、ホストファミリーとの会話が円滑になるトレーニングをしてくれたように感じた。こんなにも「楽しい」と思えた授業は久しぶりで、午後も学校にいたい、と思っていた。しかし、午後のイギリス内を巡る時もクレッシー (English teacher) の話を聞きながら、学んだり話したりするのとても楽しいということに気づいた。いずれにせよ、クレッシーはとても丁寧になりやすく説明してくれ、私の話もきちんと聞いてくれるので、沢山会話を交わし、英語で話せた嬉しさが楽し

さに繋がるのには変わりはない。クレッシーは観光地の説明中に話した内容を次の日のクイズにしてくれるので、集中力も切らさず、観光ができたと感じている。私は元々、将来英語で外国の観光地を紹介するのが夢だが、クレッシーのように人を惹きつけられるようになりたいと思った。私は少しでも英語を話せるようになりたいため、なるべくクレッシーに話しかけるようにした。クレッシーは、そんな私からの質問に、一問一問丁寧に答えてくれた。そして、その観光地に関係のない話まで楽しく話すことができるようになった。その際、英語がおかしいと直してくれるので、正しい英語を身に付けることができた。クレッシーはそんな私を見て、「よくやったわ。」と言い、褒めてくれるため、とても嬉しく、明日も頑張ろう、という気持ちになった。特に、『ウインザーの陽気な女房たち』の喜劇鑑賞の休憩時間や、鑑賞後、クレッシーに積極的に話しかけ、沢山コミュニケーションをとることができた。短い間ではあったが、これまでクレッシーから英語を教わってきた私がクレッシーに、「この劇は私にとって聞き取るのは難しい」などというのは言いにくかったが、それが本当の感想であり、クレッシーに何かを伝えることで、会話が生まれるかもしれない、と「ポジティブ」に考え、それを言ってみた。すると、クレッシーは「私も八十%くらいしかわからないかったよ。」と、言ったのだ。驚いた。何故か？ 「あれは古い英語が含まれているからよ。」クレッシーはそう続け、「正直な感想を言うてくれてありがとう。最後まで見続けることができたのは素晴らしい事よ。」と言ってくれた。またである。ポジティブに考え、行動をしたら、クレッシーとの会話を続けるきっかけになったのだ。〃ポジティブに考えて、一歩踏み出せて良かった〃。私がこれほどまでに自分の行動に感謝したことはない。とても小さなことだが、とても嬉しかった。

学校最終日、プレゼンテーションは、クレッシーやグレイス (English assistant) にアドバイスされたことを思い出しながら上手く話すことができた。授業の最後、クレッシーに手紙を渡し、写真を撮った時、クレッシーは、「今日のプレゼン良かった！ そしていつも沢山話しかけてくれてありがとう。楽しかったわ！」と言ってくれた。この二週間、楽しく頑張れて良かった。素直にそう感じた。そして、クレッシーには、感謝してもしきれない思いだった。その夜、夕食を食べた後、アマンダとデイビットと、沢山話をした。キエラが凄い人であること、デイビットは何でも作るのが大好きであること、今日と一緒に過ごす最後の夜であること・・・今まで普通に話していた時間がとても貴重なものに思えた。寂しかったが、楽しく話げできた。本当の家族のように。

別れの日、アマンダは、言った。「また会いに来てね。」私の答えは勿論「Yes」だ。大切なことに気づかせてくれたイギリスに、温かい第二の家となったホストファミリーの家に必ず行きたい。

その時はどのような自分になっているのだろうか。第二の家で、母国語のようになった英語を話しているだろうか、話しているに違いない。ポジティブ精神を忘れずに。